



発行・古平町史編纂委員会
編集・古平町史編纂室
第八十四号(毎月一日発行)
平成八年九月一日

北海の古平風土物語 (五二)

鮭場 子供たちの四季の子供たちと仕事の手伝い (7)

高橋 源 五口

■冬の巻
秋のイカ漁の真つ盛りの頃はイカ干し、イカのしや、雨イカの塩辛漬などに忙しく、それらを手伝っている子供たちはみなイカ臭くなるほどであった。学校ではするめかじりが盛んであった。

秋イカ漁も一段落する明治節(現在は文化の日)が過ぎる頃から、次第に寒さがきて雪が降り出す。子供たちは降り積もった雪で、雪だるま作りや雪合戦をして遊ぶ。根曲がり竹を使った竹スキー、手頃な木を引き割ってスキーやそり作りにも忙しくなる。

山の近くの子供たちは、鶏を狙って来るイタチや、畑に残つ

たキャベツなどを食べに来る野ウサギ獲りを始める。格好なところにはイタチ箱やトラ挟み、針金で作った罠を仕掛ける。夕方には餌付けに回り、朝早く掛かっただかどうか見回りをする。思わぬ罠があつてそんな時は大喜びである。時には、トラ挟みに野犬が掛かつていてびっくりすることがある。

イタチの毛皮は、小樽から来る商人が買い取って行くが、半生皮一枚が上等品一円、並等品七十銭、小型品五十銭ぐらいであった。

野ウサギの肉は兔汁にし、毛皮はチャンチャン(袖無し)や襟巻き、外套の裏に張りつけて防寒具にしていた。

*イタチは、大正の初め頃に本州から道南地方に渡り、それから北上して積丹半島一帯に増えた。野ネズミ退治に大変有効であったが、鶏を好んで襲うことから養鶏にとつての大敵であり、毎年の秋・冬になると相当の被害があつた。その後、全道各地に広がつたようであるが、この地域でのイタチの被害は少なくなつた。

雪が深くなる頃から子供たちは坂道や山の斜面に集まって、手作りのスキーや竹スキー、雪そりで遊ぶ。

◎蝦夷紫のこと

アイヌの人たちの着ているアツシに、きれいな薄紫色に染めたものがある。これは何で染めたものかと聞くと、フラシノというものの実であるという。フラシノというのは和名が浜李(ハマナシ)なまっつてハマナスといわれている)のことである。

これを口の中に入れて

アイヌの[ことわざ]から 世間はなし集

かみ、その汁で染めるのだという。色合いが見事で江戸紫のようである。

◎オプケニのこと

また、蝦夷地にオプケニ(和名コブシ)という木があるが、松前では四季桜という。この花のつぼみを採り、はれものができたときに呑みこむとはれものの口が開き、或はそれが散ってしまうものである。

町のげた屋さんではかねげたという、げたの裏にスケートの刃のような細い平金を打ちつけたものや、ゲロリと呼ばれる、台の厚いげたにスケートの金具を取りつけたものが売つていて、かねげたは一足二十五銭から三十銭、ゲロリは一足四十銭から五十銭であった。

これらを履いて水をかけて凍らせた坂道を滑るので、小さい子供たちが通るのに危険だからと学校から止められていたが、それでも坂に水をまいて氷滑りをする悪童は絶えなかつた。

●戦争の好況で採掘を再開

昭和六年九月満州事変が始まると、中国は日本へのマンガン鉱石の輸出の禁止をしたため、製鋼に必要であったマンガンの国内価格が急騰した。このため、売れ行き不振で一時的に荷を停止していた稲倉石鉱山ではまた採掘を始めることになり、このことがその後、稲倉石鉱山が大きく発展する基となるわけだが、この年の生産量は百八十トに過ぎなかった。

●輸送道路の整備

昭和八年、町は稲倉石鉱山の今後の発展を予想し、物資輸送の路線であるタモギタイ線の廻り淵から国有林地までの二千四百メートルにわたって悪路の改良工事を行った。

工事は札幌土木事務所と委託契約をし、工事監督には草刈勇技手が来町して当たり、労力費三千七百六十八円七十四銭を支

— 百年の歴史を閉じる —

稲倉石鉱山 (5)

出して改良工事は竣工した。当時、人夫一日の賃金は八十銭であった。

●年産計画を一挙五倍に
市況が急激に好況になったことから、稲倉石鉱山では昭和九年の年産計画を、前年度の実績の約五倍の一萬一千ト(月産二千ト)とした。そして、

これを達成するため十項目にわたる計画がたてられた。

- ①十キロント自家用内燃発電所の建設
- ②坑内ポンプおよび巻揚機の電化
- ③万勢坑・金勢坑の坑内軌道の敷設
- ④選鉱所の設置
- ⑤ばい(焙)焼炉の増設

- ⑥元山く堤の沢間五ギメールに架空索道架設
- ⑦堤の沢く古平間のトラックによる鉱石の運搬開始

- ⑧古平事務所(港町)の開設
- ⑨古平貯鉱所(港町)の設置
- ⑩元山事務所、分析室、職員社宅、鉱夫社宅、職員合宿舎

鉱夫合宿舎の新築

この計画は好況に支えられ直ちに実行に移された。

●古平でも探鉱ブーム
折からの軍需景気を背景にして鉄鋼業界が活況になると、国内での探鉱がにわかに盛んになったが、古平でも探鉱がブームになり、古平郡内での探鉱のための踏査や採掘の出願が相次ぎ、山奥まで空き地がない程坑区が設定された。

昭和九年、古平川左岸の上二又鉱山では須貝豊司(港町)、片沼喜四郎(同)ほか金・銀・銅などの試掘をしたが思うような結果が得られず、資金などの関係から昭和十七年頃に鉱山は放棄された。

●稲倉石鉱山の友子制度
社会保険制度や福祉厚生組織のない時代から太平洋戦争の頃まで、鉱山労働者の間に友子制度(友子同盟)という相互援助の組織があったことが知られているが、稲倉石鉱山にもこの友子制度があった。

昭和八年頃、宮城県人・千葉市治という男が自工夫(その土地の人)、渡り工夫を浜町・堀

ピヤホールに集め発会式を行った。友子内での序列は加入順とし、友子が病氣などのときには各鉱山へ奉加帳を回しその救済活動に当たった。稲倉石鉱山の友子制度は昭和十一年頃までであった。

●新会社の設立

昭和九年一月、鉄興社は稲倉石鉱山の経営を本社から分離して、新しく資本金五十万円の稲倉石鉱山株式会社を設立した。新会社の役員はすべて鉄興社の役員であり、新会社はそれら間もない同年十月には鉄興社に吸収、合併され解散した。この新会社の設立と合併は、すべて鉄興社の増資のためであったとその社史で述べている。合併により鉄興社の資本金は二百万円に増加したのである。(続く)



在りし日の

主人をしのんで

(2)

渡辺 ハツエ

少し大きい舟に乗り換えたい
ということで、とうとうわが家の
愛舟を手放すことになりました。
わずか0・九トンの小舟で
すが、今まで事故もなく、時
は大漁へと導いてくれた縁起の
よい舟でもありました。

かねてから業者に頼んでおい
た商談がまとまり、舟主になる
方がトラックで受け取りに来ま
した。

主人は早速自転車で波止場
へ、私もあれこれ迷いましたが
やはり見送らなくては——と
自転車を走らせました。ところ
があいにくの強い向い風、思う
ようになかなか進みません。舟
の運び出しに間に合うよう
と、祈るような気持ちでペダル
をふみました。思いが通じたの
でしょうか、波止場に着いた時
は舟が半分くらいトラックに乗
せられていました。

今度の舟主の方は実直そうで

「良い舟が授かった」
と心から喜んでくれました。

主人が、「この舟では事故に
も遭わず、漁にも恵まれました。
どうぞこの舟で大漁するこ
とを祈っています」

と言いますと、その方は、

「私も七十歳になるけど、まだ
まだ頑張りますよ」

と、老いても意気盛んなものが
ありました。こんな方に出会っ
て、主人ともどもうれしく思
いました。

いよいよ別れです。主人はし
きりに舟べりを叩いて、

「頑張れよ、大漁させてやって
くれよ」

と叫んでいました。その声に私
は胸が熱くなるばかりで、これ
までのいろいろな思い出が次々
と浮かんで消えていきます。

舟の安全と、新しい舟主さん
のご多幸を祈りながら見送った
のでした。

熊野神社

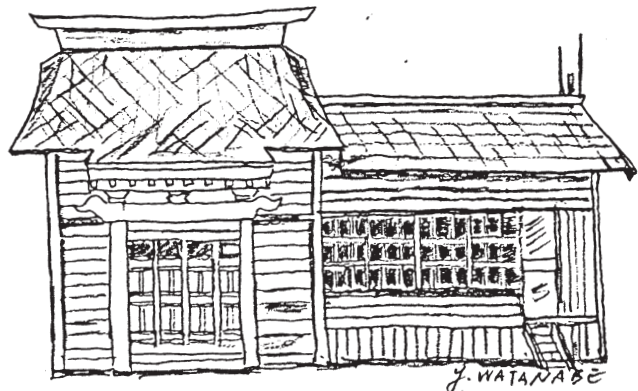
境内に大正十五年に建てられ
た『開村五十年記念』碑がある
が、明治十年にこの地に入植し
た人たちが農作物を熊の被害か
ら守るために、熊除けに「熊」
をまつる小さな社を建てた。は
じめは大きな木の切り株の前に
供物をかさざつて祈願していたと
いう。

その後、工藤末松・木村彦松
ほか地域の人たちの手によつて
小さなお堂が建てら
れたが、農業にかか
わりがあり、熊をま
つたことから、熊
野三山の本宮の祭神
である「食(け)」
の神・須佐能男命(スサノオノミコト)をまつること
になった。

もともと熊の神社であったことから、祭神にもあや
かって『熊野神社』とした。

大正十四年、たまたま三山神社(文化会館の所)が
浜町・恵比須神社に合祀されることになったことから
社殿を買い取り現在地に移築し、石段は町内の壊した
石蔵の石を部落民が運んだ。熊野神社の鳥居は戦後、
恵比須神社の鳥居を移したものである。

ふるさとスケッチ



古平美術協会 渡辺嘉之

岬短歌会詠草

汗にまみれ働く青年よ今の世にはるけきものを今日は見たりき
群来沖のいか釣りの灯のゆらゆらと何にあやふく吾をいざなふ
鳥の声に目を覚ましたり今日も又通勤にゆらるるわれか
夏祭のためにいちこのジャム作る友にも送らむふるさとの味
空を見るが一番好きと書きし生徒に長き批評書き吾もうれしく
行くあても決めぬ列車の旅夫と新得駅に下り熱き蕎麦食ぶ
名も知らで愛でしよ庭の草花を勿忘草と歌会にて知る
哀しみの捨てどころなく舟形の花器に活けをり野地落の花
二輪草の清しき花に誘われし朝の化粧は少し白めに
ひと隅を飾る数のみ摘みとりて落の葉に包む二輪草
こまかな黄楊の花匂う一枝を神の御饗の魚に添へぬ
漁終へて港に入り来る船の音明けゆく町の躍動の音なり
待ちてゐしわが町の福祉館建てり広くて足元の段差なきはよし
老境に入りて集う人々はさはやかなり福祉センターの一日

魚屋 友子
越田由起子
轟木富美子
堀 典子
堀 昭子
山 口 スエ
池 田 テル
越 野 敏雄



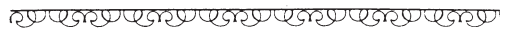
しのび寄る秋立つ中に夫逝きしどくだみ咲く菊の彩り冴えて
 通院のバッグの中に痛み止めを確めて急ぐ朝のバス停
 石の表札掲げし息子の新室に明るき窓のわが部屋もあり
 独りゐて春の日長をもて余す「みたらし団子」の生地を練りつつ
 更衣へにカーテンも替えてすつきりと病む舅の部屋特に明るくす
 お一人居に給食弁当届けゆく元気なお声に安堵をしつつ
 クラス会の招待状の届きたり教え児は四十歳になりしか

榭 佳代
 菅原 節子
 鈴木 時子
 竹内 コト
 田中 香苗
 丹後 初江
 長崎 フユ

吉平ホトトギス会

昼湯浴み済ませ船頭墓参り 水見 句丈
 蟬時雨北海道の国有林
 窓あけて見るマンションの遠花火 木村 芳園
 ビル街となりしふる里盆の月
 盆踊り輪にならずして終わるなり 本間 正次郎
 換気扇さんまの焦げが匂う頃

卒寿ともダンスレッスンさわやかに 山口 浪
 墓参り叶へしことの晏如かな
 ジョギングの荷になるささげ頂けり 福井 幸平
 頂きしささげ気になる万歩かな
 浅き瀬にとどまる盆の施餓鬼もの 熊谷 楠丈
 精霊舟小さくゆれてすすみけり
 棚経の短きものと言うけれど 斉藤 波留
 母よりも夫よりも生き墓洗う



土地くの銘菓持参の盆の客 仲谷比呂子

手土産の積丹雲丹がよろこばれ

ジョギングのコースいつしか秋の風 仲谷美砂

孫浴衣少し娘らしくなりにけり

引越しの根分の菊を貰えけり 大島喜恵

お隣の風鈴耳に畑仕事

仰ぎ見る天守は高し花曇 越野清治

もの不言孫が手を引きふらここに

退院の顔にまぶしき春の風 越野敏雄

看護婦の白衣も汗の大手術

春が来て小川チョロくうたつてる 仲谷安代

まん月や雲といっしょにかくれんば

優勝を決めし一球炎天下 大和田絵伊

優勝旗受ける日焼けの孫の顔

天高く選手宣誓ひびきけり

(孫さんのご活躍おめでとございます)

網元の館を囲む花イボタ 岩瀬みのる

堤防のトリムコースや閑古鳥

暮敵も今日は端居の友として 福井久美子

ヨサコイソーラン積丹の夏炎ゆる

退院の夫になまこの肴かな 越野スミ子

退院の夫の夕餉に鮎を焼く



柳



浴衣着て墓参りする日暮坂 石井愛子

盆おどり幼馴染と手拍子で

孫が来る婆もつくろい眉を引く

歯はずして鏡を見たら亡母が居た 渡辺ハツエ

交通魔世の中順番狂わせる

明日あるか知らぬ命の米を研ぐ

盆が来りや孫子が来ると待ちました

（ねこまたぎ）って

知ってますか

福井 幸平

今回の「食べものあれこれ」を書くにあたって、少しばかり調べていますが、四、五日前、あるお母さんに「猫マタギって知ってるかい」と尋ねたら「それなんのこど？」と言われ、時代差を感じました。そのお母さんは五十過ぎですが、今の若いお母さん、子供たちが知らないのが不思議でもなんでもないはずで、なおさら書く意欲がわきました。

昔のしょっぱい塩蔵鱈（塩引き鱈）のことで、要するに余りにしょっぱいので、猫も食べずに跨いで通り過ぎるということらしい。猫ジャンプと言うこともあるそうですが、僕たち貧しい者には、猫が食べなくともご飯の湯漬けにして頂いたものです。ある所ではこれで三平汁を作ったと知らせてくれた方もおります。次回に三平汁のことは改めて書くことにして、猫マタギとはなかなかとんちのきいた名前で、もしかしたら江差の繁次郎でもつけたのかなあ？ 妹の話では、値段も安く、塩抜きにキラス（豆腐のしぼりかす）にまぶしておくとおいしくなるとのこと。

秋あじ（鮭のこと）なんて当時は高価な

もので、これも年に一回、お正月にだけ食膳にのったような気がします。（気がするくらいだから無かったのかも知れない）猫マタギ、なつかしい言葉であるしユーモアでもある。勿論、どの辞典にも多分ないだろうと思います。

「にぎりめし塩鮭ならぬ猫マタギ」こんな一句ができました。

これも冷凍・冷蔵施設のない時代の食べものか？ 樺太ではネコマタと言うそう、案外、樺太が言葉の発生かも——。

なつとう売り

竹内 コト

戦前の町の風物をいろいろと思い出すことがあります。

毎日のように朝早くから、「ナット、ナット」と十二、三歳の男の子がだいたい同じような時間になると回って来ます。

私の家では家族も多かったため、朝食には手軽な納豆をよく買って食べた記憶があります。当時、たいていの町では朝晩に納豆売りの声が聞こえていたようです。

昔の納豆というのは、今のように容器に

入っていてきれいに包装されたものではなく、三十センチ程もある苞（つと）にわらぶとともいうがわらを束ねたもの）の中に入れて、それを押し開いて出すとわらの匂いがぷーんと鼻をかすめます。そして自然の納豆の香りが食卓いっぱいになり、とても食欲がそそられたものでした。私の家ではみんな納豆が好きで、私も大好きなお惣菜の一品です。栄養もあり、大根おろしやきざみねぎなどを加えて、子供の頃は喜んで食べていたものでした。母が、「納豆をおかずにするにご飯がハガイグ」と、よく津軽弁で言っていたことを思い出します。

納豆売りの人は肩から大きな袋を下げ、小脇に五、六本を抱えて、寒い冬の朝でも町中を大きな声を出して売り歩いていました。苞にくるまった納豆ひとつを思い出しても昔の人の生活の知恵と、今からみると不自由な中にも自然をうまく利用し、それらを役立てながら暮らしていたことに感心させられます。



遙かなる故郷の思い出

[24]

『キツネ』の話

(1)

橘橋 美我 春

私が子供のころは、キツネにだまされたという話をよく聞いたものだが、そのキツネを見たという人はあまりいなかったよ
うだ。

お盆に帰省したときに、古平の実家で弟や姪に、

「このころ、きつねにだまされた人いねエベガ」と聞いたところ、

「そつたら話、今どき聞いたことねエドアー」と、

と、一笑に付されてしまった。

今は古平でもキツネが出て来るとか――。

昔、なぜ姿を見せないキツネにだまされて、今、町にまで出て来るキツネにだまされないのか？ へんな話だ。敗戦で世の中ががらりと変わってしまった、キツネも神通力を失ってしまったのでねエベガ。

古平も、昔はキツネが人をだ

ます？ という場所が、人のうわさでは何か所があった。

（その一）

私の祖母が中年のころの話だが、八月のお盆になると、盆踊りが丸山町の前で毎年盛大に行われていた。夜の九時頃ひと踊りして家に帰り、用達しをしてからまた踊るために玄関を出たら、川向こうで知り合いのおばさんが道路を行ったり来たりうろうろしている。何をやっているんだべと思ひ、

「おがつちゃ（かあさん）、そこでなにやってのゲ」と、声をかけたら、

「あれー、いまこの目の前がみんな海になってしまって、どうもこうもならぬぐなって困ってだどごだ。おめえさんの声聞いたら、いっぺんに海がなくなつて――、アレなんだつたんだべがネー」

「キツネにだまされだんでねエベガ？」

「みんな賑やがに盆踊りやってくる最中に、こつたらどこにキツネなんか出るべが？」

「おらもわがねども（わからないうが）、心配だからオガツチャば家サ送っていぐべ」

みやこさん（飛沢さん）の橋のところまで行つたら、「こつ

~~~~~

★はじめに

「地名」というのはなかなかおもしろいもので、特に自分の住んでいる所となるといっそう興味わいてくる。

日頃から「古平の地名」の由来について疑問に思っていることがあるので、  
違った見方で  
また考え直し  
てみたい。

## 古平の地名

資料として使  
用したのであ  
る。

★戦前の郷土読本

戦前の小学校では『北海道郷土読本』というのがあって、北海道の地理・歴史を教えた。これは当時の軍国主義の影響で「郷土を愛する」という心を愛国心に結びつけようとする「ねらい」があった。昭和七年には道庁が各

からは大丈夫」だと言ってオガツチャは帰って行つたが、翌日熱を出して寝込んでしまったそう  
だ。

オガツチャの歩く先々が、みんな海になってしまつて動くことができなかったというのは、いったい何だつたんだべ。

これは、キツネにだまされたんではねエベガが……。

~~~~~  
町村に、郷土教育のための郷土読本を作るよう通達を出した。

そこで古平町では、当時の古平（尋常高等）小学校の先生方が開校六十周年を記念して、ガリ版刷りで『古平沿革誌』を作成し、それを「郷土・古平を学ばせる」参考

★古平の語源は「赤岩」？
大正七年に発行された『古平町沿革誌』には古平の名称は、

「フレルピラ」または「フリーピラ」から出たもので「赤岩」の意味であり、また「赤土山」があるということでもある。
と書かれている。（続く）